御手洗潔の挨拶

島田荘司

御手洗潔の挨拶
島田荘司
© Soji Shimada 1991

1991年7月15日第1刷発行
1993年4月5日第5刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——有限会社中澤製本所

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-184943-3

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫

御手洗潔の挨拶

島田荘司

講談社

目次

数字錠　7
疾走する死者　101
紫電改研究保存会　181
ギリシャの犬　223
御手洗潔の志（こころざし）　319

島田荘司

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

御手洗潔の挨拶

数字錠

1

私が御手洗との長いつき合いを思い起こす時、いつも頭に浮かぶのは彼の風変わりな性格のことである。

不可解な事件や物事に接した時に彼の頭脳が見せる驚くべき分析力や、整理能力の緻密さなどは、それはそれで尊敬に値するが、そういった能力は、彼以外にも多くの先達に前例があることと思う。私が彼のたび重なる傍若無人の仕打ちに堪え、辛抱強く友人づき合いを続けたのは、ひとえに彼のこの風変わりな性格が何故のものかと、私の好奇心をそそったからにほかならない。

私同様、わが友のこのある意味では珍妙ともいうべき存在に興味をひかれる読者の方々は、やはり同じ思いと推察するので、私は今回ここにひとつの思い出話を披露しようと思う。

あれは例の「占星術殺人事件」が解決してまもなくだったと思うから、一九七九年の暮れのことだった。十二月に入り、クリスマスも近づき、街は年末のあわただしさを見せつつあった。

当時私たちは、私の最初の本、「占星術殺人事件」の出版がすんなりと決まり、初版の印税が入ったこともあって、綱島から横浜馬車道へと引っ越しの準備を進めている最中だった。したがってわれわれも世間同様落ちつかない気分でいた。そんな時、突然例の竹越文彦刑事の訪問を受

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

けたのである。

今思い出してみれば、あの事件も他のものと同様、御手洗の分析的能力が明らかな形で示され、一緒に働いた私に深い感銘を与えはしたが、私がこれまでに知る多くの不可解な例に較べ、特に鮮やかだったというわけではない。にもかかわらず、あの事件は私にとって他を圧するほどに忘れがたい事件なのである。御手洗潔という男の、風変わりで挑戦的な性格が、あのような形で現われようとは、私は予想もしなかった。そして正直に告白すれば、私は深く感動もしたのである。

近頃、私は未知の読者から多くの手紙をいただくようになった。御手洗の近況を報せ、早く別の事件を教えろというのである。まったく予想外のことだった。私から見ればあれほど欠点の多い男が、これほどに世間から好意的に迎えられようとは夢にも考えなかった。

ほかの仕事で忙しく、私は今までわが友を紹介する仕事を怠ってきたが、この点をここで深く詫び、久方振りに御手洗を読者の前に紹介する一回目として、私は一九七九年クリスマスの、「数字錠」事件を選びたいと思う。もし読者諸兄が私同様御手洗の性格に心ひかれ、そのよってきたるところを推理したいと思っておられるなら、あの事件こそ最もふさわしいと考えるからである。

竹越刑事は御手洗の占星学教室に入ってくると、御無沙汰しております、また十月は大変失礼いたしましたとわれわれに丁寧に頭を下げ、来客用の粗末なソファに腰を降ろした。彼はひどく

恐縮しているようだった。部屋のあちこちに荷造りして置かれた引っ越し用の荷物を眺めながら、彼はしばらく無言だった。

「引っ越しをしようと思うんですよ」

御手洗はやりかけていた仕事を中断し、引き出しに放り込むと、竹越刑事の前の椅子に廻ってきながら言った。

「ほう、どちらにです？」

刑事は訊いた。

「横浜の馬車道です。いい話があって、急なことなものですからね、あわてて荷造りをしているところなんです。ちらかしていてすいませんね」

「とんでもない！」

御手洗は腰を降ろした。

「何か御用だったんですか？」

「実は、ちょっとした難事件を抱えまして……」

そう言って、刑事は間をおいた。それから言いにくそうに続けた。

「こんなふうに顔を出せた義理ではありませんが、あれは今年の春の事件でしたか、例の梅沢家の事件で大変お世話になり、先生の大変な手腕を拝見させていただいたものですから、今回も、ちょっと御相談にあがれないものかと……」

そう言って刑事は御手洗の顔色を見た。彼は御手洗のことを先生と呼んだ。私の友は、鹿爪ら

しい顔をして、顎のあたりをさかんに撫でていた。話を聞こうかどうしようかと、迷っているようにみえた。そして意を決したように、こんなふうに言う。

「その事件というのは、むずかしい事件ですか？」

すると竹越刑事はひどく恐縮した。

「はあ……、その、簡単な事件ならよかったのですが、お忙しいところ、まことに恐縮なのですが、いくらかこみ入った……」

「ああそれなら結構です！」

御手洗は明るい顔になった。

「お話しいただけますか。石岡君、僕はコーヒーね」

「はあ……」

刑事は言い、私はやむを得ず立ちあがった。

そうはいうものの、御手洗は私がコーヒーを淹れて戻ってくるまで、事件の話を始めるのを待っていてくれたらしい。私がコーヒーカップを刑事の前に差し出すと、待ってましたというように、彼は話しはじめた。

「むずかしい事件です。しかしこの前のもののように、署の連中全員がお手あげで、お宮入りが目前というわけではないのです」

すると御手洗が、明らかにがっかりするのが解った。では全員お手あげになってからもう一度いらして下さい、自意識の強い彼がそう喉まで出かかったのが解った。

「実は犯人の目星はついているんです。まだ一人に絞りきれずにいるんですが。ただこの怪しい連中が、犯行を成すのが物理的にむずかしい、とこういう状況なんです」

「ほう」

御手洗はやや気のなさそうに、椅子の背にそり返った。警察官連中がまだ手をあげているわけでもなく、さらに犯人の目星までつけている、そう聞いて彼はいくぶんやる気をなくしたのである。

「四ツ谷駅付近、正確には新宿区四谷一の六の×に、吹田電飾という、小さい看板屋があるんです。社長を入れて、従業員がわずか六人という小さな会社なんですが、ここの社長、吹田久朗五十一歳が殺されたんです。

犯行日時は、もう五日前になりますが、十二月十二日、朝八時から九時の間。凶器はその会社で、アクリルや塩化ビニールを削るのに使っていた、大型の登山ナイフです。

この会社は、看板製作の会社です。看板の注文を受け、造って、持っていって取りつける、こういう仕事です。看板はブリキなどの金属も多いが、アクリル、塩化ビニールなどのプラスチックも多い。こういうものの切断は、当然電動ノコギリを使いますが、細かい部分の細工に、登山ナイフも使うそうです。こういうナイフが、会社の仕事場にはいくらでも転がっていた。調べによれば八丁ありました。このひとつで、吹田社長の心臓を一突きです。あおむけで死んでおりました」

竹越刑事は、黒革の手帳でなく、グリーンの表紙のメモ帳を開き、読みながら説明する。

「正面からですか？　争った形跡は？」
「ありません。というのは、吹田社長は仕事場の隅のソファで、仮眠中だったと思われるんです。眠っているところを正面から、この犯人は卑怯にも刺した」
「なるほど」
「八時から九時というと、時間帯としてもえらく早いです。社長自らそんなに早い時間より出社していたかというと、そうではなく、被害者は、仕事で徹夜をしたわけです。それでいっ時仮眠をとっていた」
「ふむ」
「そもそもこの吹田電飾という会社は、腕に覚えのある吹田社長が、一人で始めたような会社なわけです。吹田社長の腕が抜群なんですな。他の若い社員は、いってみれば社長のお手伝いのようなものでして、社長に代わって看板が描けそうな者というと、北川幸男（ゆきお）という社員が一人だけでしょう。そういう状態です。
　ですから看板描くだけだったら、社長が一人でできるわけです。事件のあった日、前日より急ぎの仕事が入っておりまして、十二日までに看板を仕上げなきゃいけなかったんですね。それで十一日から十二日にかけ、社長の吹田が一人徹夜で看板を描いていた。社員をあんまり残業させちゃ人件費が高くつくし、また残業させても看板描く腕のない者が多いので、あまり意味がないわけです。それより自分が夜っぴて看板を描き、出社してきた社員連中に朝一番で取りつけに行かせよう、とこういう段どりにしていたわけです。看板の取りつけというだけなら、若い連中に

まかせることもできるんです。

しかし出勤してきた社員連中は、社長の死体を見つけたというわけです。徹夜した時、仮眠をとったり、仕事中ちょっと休憩したりするために、仕事場の隅にソファがあるんですが、その上で吹田久朗は死んでいた」

「発見者は誰です？」

「トラックで出勤してきた社員四人です。この会社は、社長と、さっき話に出た北川幸男を除いて、若手社員四人は荻窪の独身寮からトラック通勤をしているんです。

社長は、会社から徒歩十分ばかりのところに家があります。北川幸男も、社から徒歩十五分ばかりのところにマンションを借りております。この二人は妻帯者ですので。

残る社員四人は、若いし、まだ独身ですので、独身寮から通ってきております。荻窪に、社長の吹田久朗の兄夫婦がやっておるアパートがあるんですね。このアパートの四部屋を、吹田電飾の社員寮にしているわけです。

このアパートの前には広い空き地がありまして、ここに会社のトラックが置けるわけです。むろんこれは兄の方に弟は駐車代を払っております。一方、四谷の会社の方は駐車場難でして、駐車場がないんです。しかし会社自体、そう大きくない貸ビルではありますが、ビルの一階全部を使っておりますので、それほど仕事がたてこんでいない限り、仕事場の隅にトラックの一台くらいは入るわけです。ですから、吹田社長は荻窪からの通勤組四人には、トラックで通勤させるようにしていたわけです。そうして仕事中トラックは仕事場の端に入れるようにするか、それがで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com